

JICA専門家として海外へ ～チュニジア～

雇用・能力開発機構本部 職業能力開発企画部国際協力課

後藤 豊

1. はじめに

2度目の長期専門家としての業務を終えて、2003年4月に日本にやっと帰国したときに、この原稿を依頼された。海外業務に興味がある方が海外での生活がどんなものか少しでも想像できるよう、赴任から帰国までの生活面を中心の内容にしたいと思う。

2. チュニジアへ

2000年4月のある日、当時所属していた九州職業能力開発大学校の管理職からチュニジアに長期派遣専門家として行かないかと打診があり、当然簡単には決断できないので1週間の猶予をいただいた。

その日からチュニジアに関する情報を収集して、家族が快適に生活できる国かを判断し、そして、私が出した結論は「行きます。」であった。

そして、派遣は2001年4月、それまでは語学力の向上とプロジェクトに関する資料に目を通し、JICA（国際協力機構）派遣前研修を1ヵ月受講し、派遣2ヵ月前となると家財の処分やいろいろな手続きで奔走する毎日であった。

2001年4月10日、成田空港からチュニジアに向けて旅立った。初めての地での生活に不安と期待を抱きながら、パリを経由してチュニジアの首都“チュニス”に次の日に到着した。意外ときれいな街…という第一印象であった。

その印象とは裏腹に到着直後すぐにトラブル発生、飛行機に預けたトランクが一部届いていなかった。届いていないトランクにネクタイが、次の日には関



ホテルからの景色

係機関へのあいさつ…、ほかの専門家から借りて何とか切り抜けた。トランクは数日後にホテルに到着し、やっと荷物が揃ったが、これから同じようなことが起こると実感した。

また、早くチュニジアの通貨すなわちディナールの価値を把握して現地の物価状況を知ることが、生活するうえで必要であった。当時1ディナールは85円程度でタクシー初乗り料金が30円程度だったが、チュニジアの価格で高いか安いかを判断できるようになることが法外な値段での買い物を避ける方法だと思った。

3. 生活基盤を整える

3.1 ホテル

住居が決定するまではホテル住まいで、始めはすべてが目新しいもので新鮮に感じられた。ホテルはそれほど高級なところではないが、部屋にキッチンが付いていたので自炊を早速開始した。食材はスーパーマーケットや市場で購入し火力の弱い電気コン

口で半日かけて夕食を準備していた。また、ホテルでは息子も思いっきり発散できずに体力を持て余してリラックスできないので、なるだけ早く住宅を契約しようと思う毎日であった。そんななか、ホテルから見える近くの公園の緑が青々として清々しい気分になったのを覚えている。

3.2 アパートでの生活を開始

2001年5月にアパート形式の住宅に引越し、チュニジアでの生活を本格的に開始した。引越し当日は、生活するために必要な寝具や食材を購入するためにタクシーを捕まえて、できたばかりのチュニジアで一軒のカルフール（スーパーマーケット）へ向かい、その帰りアパートまで道順をタクシー運転手に説明するのに一苦勞してようやく帰り着いた。これからちゃんと生活ができるであろうか？ ホテルのときは、プロジェクトで準備した運転手付きのレンタカーが迎えに来ていたが、次の日からはタクシーを拾い職場の場所を説明し、職場に通勤する。ホテルを離れて生活を始めると自分で何とかしなければならないことが多く、JICAの研修でフランス語を数週間勉強したが、うまくしゃべれるわけではないので、会話本を片手に毎日悪戦苦闘だった。



スター・ウォーズのロケ地

3.3 自動車

家族で赴任したので、息子の幼稚園への送り迎えなどで当然自家用車が必要であった。いろいろとディーラーを廻り車種を決定した。納車はディーラーに直接受け取りに行き、運転して自宅に戻ることに

なっていたのだが、チュニジアの運転マナーは日本では考えられなく、“車線変更はウインカーなし”、“反対車線を走行”、“3車線を4車線で使用”など日本人から見れば交通ルールというものが存在しない状態と同じであった。その中を初めて運転し自宅に戻ることは大変なことであった。初めて運転するのが嫌という気持ちになった。1ヵ月も経たないうちにスペアタイヤとホイールキャップが盗まれた。次から次へと何かが起こり、出費も増える。車は走ればよいと思うしかないようであった。



レザー・ルージュ

3.4 交通渋滞

チュニスには朝と夕方にラッシュがある。普通のラッシュならばあまり気にならないのだが、信号機のない交差点は四方から車が進入し、それに反対車線を逆走して交差点に進入するのでますます渋滞する。この状態でどのように進むかを考えるだけで嫌になった。チュニジアの辞書には“譲り合い”という言葉は存在していないようである。

4. ワールドカップサッカー

2002年6月にワールドカップサッカー大会が日本と韓国で開催されたが、その大会にチュニジアが出場した。それに日本と同じグループであったので、日本からの報道陣が次々と来チュして、綺麗な場所からしか中継しないので、私たちは何不自由なく生活していると勘違いされた。しかし、チュニジアという国が日本で知られるきっかけとなるには十分であった。チュニジアにとっても日本という国が身近に感じられるようになり、技術移転にもその効果は

若干あったのではないだろうか。

5. 砂漠旅行

チュニジアといえば南部はサハラ砂漠である。休暇を利用して、チュニジア国内旅行を家族で楽しんだ。その国内旅行はチュニスから飛行機でトズールという町に飛び、運転手付きの4WD車をチャーターして、チュニスのある北部と違って荒涼とした大地が広がる南部を周遊し、中部のオリーブ畑を見ながらチュニスに戻るコースだった。



クサル・ギレンの砂漠

映画「イングリッシュ・ペイシエント」や「スター・ウォーズ」のロケ地が点在していることから映画好きにはとても魅力的なところである。また、燐鉱石運搬用の鉄道を使用した観光列車「レザー・ルージュ」(赤いトカゲ)で、渓谷を縫うように走っていくのもこのもうひとつの楽しみである。

やはり、この旅の中心はクサル・ギレンという砂漠の真ん中にあるオアシスであろう。4WDでないと絶対に辿り着けず、ホテルといっても客室はテントである。しかし、苦勞してここまで来た甲斐があると思えるほど大自然を感じられる場所だった。お勧めはオアシスからラクダに乗って砂漠の真ん中で夕日を見て帰ってくるツアーだろうか。

6. やっぱり日本人!?

現地で生活するといろいろなトラブルが起こった。電話が突然切られたり、水道が使えなくなったりと本当に困ることばかりで、その原因は使用料の請求書が届かず、支払いできないことであった。郵便事情よりも電話局や水道局の責任で、チュニジア人も

これには困っているということだった。また、車を運転中に追突されたこともあった。私の車はテールランプが破損して、相手は大した破損がなく、「何ともないからよいだろう」と立ち去ろうとし、おまけにそばにいた警官も「大丈夫だ」という一言だった。私は保険の請求のための書類を記入させて、その場を後にした。本当にトラブル発生時には日本人の感覚ではイライラしてしまうことが多く、つくづく自分は日本人だなと実感した。当然、このようなことは技術移転中にも頻繁に起こった。

7. プロジェクトに関すること

電気・電子技術者育成計画プロジェクトについてであるが、チュニジアの職業訓練校はCAP(技能士補)を育成するセンターが48施設、電気、皮革加工、空調、繊維、被服などの分野別・専門別のBTP(技能工)やBTS(上級技能工)を養成するセンターが29施設で、このうち電気・電子関係のセンターは5施設であり、そこに新たな「電気・電子技術職業訓練センター」を創設することを、日本に対して1998年9月に技術協力要請され、2001年2月から開始された。



プロジェクトセンター

センター創設のためのプロジェクト活動としては次の項目がある。

- ① 他職業訓練センターの訓練コースおよび関連企業のニーズの調査・分析
- ② 養成訓練コースのカリキュラムとシラバスの開発
- ③ 短期向上訓練プログラムの開発
- ④ 教科書と教材の開発

- ⑤ 教官用指導マニュアルの開発
- ⑥ 教官用教材の開発
- ⑦ 教官達成指標の開発
- ⑧ 職業訓練センター組織機構の確立
- ⑨ 職業訓練センター内部規定の作成
- ⑩ 職業訓練センター年間事業計画の作成
- ⑪ 訓練生就職支援システムの作成
- ⑫ 機材使用計画の作成
- ⑬ 機材維持管理システムの導入
- ⑭ 機材維持管理マニュアルの作成
- ⑮ 機材の規則的維持管理
- ⑯ スペアパーツと消耗部品の管理体制の整備

派遣中は、センターを開校させるためにカリキュラム開発と教材開発に重点を置き活動した。しかし、チュニジア側の協力体制が不十分で、当初計画の開校は約半年延期し、2002年9月となった。

現在、プロジェクトは新メンバーとなり、訓練コースの認定と向上訓練セミナーの実施を中心に活動している。

技術移転で最も苦勞したのは教材開発であった。チュニジアでは指導員が自ら教材を開発する習慣がなく、授業といえば指導員が自分のノートから板書して、訓練生がそれを黙々と書き写す状況だった。

まず、この状況では訓練生の技能や技術が向上するとは思えないので、カウンターパートに対して教材開発の必要性と重要性を実感させるために、専門分野の基礎レベルから開始し、いろいろな教材を使用して技術移転を実施した。その結果、カウンターパートが今まで受けてきた授業と比較することで、教材の重要性や必要性を認識でき、自ら教材を作成しようと考えようになった。

次に教材を有効活用するためにも指導案が必要であり、チュニジアにも同じようなものがあったので、それを利用して授業経験のないカウンターパートに模擬授業を実施させて、指導案と教材が密接に関係することを教えた。

第一期生が入校して実際に授業が開始されると、毎日のように私に授業の内容や運営について助言を求めてきた。やはりOJTの形で経験することが、カウンターパートを育てる最も良い機会であるようだ。

8. 帰国

第一に気になるのは帰国後の配属先である。私の場合、2003年4月に帰国であったので2月に内示があり、それから帰国準備が始まった。住居や学校の手続き、そして引越しなどがあり大変忙しいものだった。何といたっても国内業務から2年間離れているため、現状を把握し一日も早く戦力になることが大変であった。

9. 専門家として必要なこと

専門家として必要だと思うことは、専門分野の技術・技能はもちろんのこと、指導技法や教材開発、そして、カリキュラム開発である。任国側からの専門家への要求は、総合的な能力開発体系の構築であり、技術・技能だけならばシニア海外ボランティアで十分であると思われる。何故、機構の職員が派遣される必要があるかを認識することが大切ではないだろうか。

次に、任期中の業務が予定どおり達成できるためには、技術移転の相手であるカウンターパートとの人間関係が大切であると思われる。これは語学だけの問題ではなく、日常の彼らに対する対応や態度が大きく影響するようだ。目的達成のためには相手とのコミュニケーションが良好であることだ。

最後に、これから海外業務を希望される方に一言、海外では指導員としての本質を問われるような気がする。指導技法を十分磨かれることをお勧めする。

10. おわりに

現在は、経験を生かしながら専門家によりよい仕事をしていただけるよう国際協力課で尽力しています。海外でこのような貴重な経験ができたのも、派遣中に多くの方の支援や指導があったからこそだと思っております。この場を借りて深く感謝いたします。ありがとうございました。